

## 「思」に対する玄奘の訳語 ——『俱舍論』と『成業論』をめぐって——

濱 野 弘 胤

はじめに 『俱舍論』業品玄奘訳で説かれる「審決勝思・動発勝思」は、梵文には見られない訳語である。そこで、本論文では、玄奘（602～664）が梵文にない語を付した意図について考察する。この「三種の思」に関しては、舟橋博士の『業の研究』に詳しく論じられ、そして近年、室寺氏や原田氏が『瑜伽論』にその典拠があると指摘されている<sup>1)</sup>。しかし、これらには世親が『瑜伽論』に基づいて『成業論』で「三種の思」を説いていることは論証されているが、玄奘が『俱舍論』で付加したことに関しては言及されていないように思われる。そこで、玄奘が『俱舍論』において付加した「三種の思」の意図を探ってみよう。まず、玄奘訳『俱舍論』の「三種の思」を問題点として挙げ、そして、そのように翻訳した根拠となった『瑜伽論』と『成業論』とで説かれる「三種の思」を検討する。その上で、玄奘がなぜ『俱舍論』に「三種の思」を付加したのかを玄奘の弟子達の注釈書及び先学の研究に基づいて考察したい。

**1. 玄奘の訳語に対する問題点** 経量部の業説を解釈する中で、玄奘訳は次のように梵文や真谛訳に説かれない「審決勝思・動発勝思」なる「三種の思」という訳語を使用している。

【AKBh. 業品】特殊な思によって、それ（定心でない無表）を引き起こす特殊な〔思がある〕からである。（AKBh.195<sup>24</sup>）

【真谛訳】〔散の無表は〕本の故意の差別に随ふに由りて引かれ及び事の故意の差別に依りて生ずるが故なり。（大正 29・226b）

【玄奘訳】〔散の無表は〕審と決との勝思と動発勝思との引生する所なるが故なり。

（大正 29・68c）

この中、梵文に説かれる *cetanā-viśeṣeṇa tad-ākṣepa-viśeṣāt* を玄奘は「審決勝思・動発勝思」と訳している。しかし、「勝思」に当たる梵語はあるが「審・決・動発」に当たる梵語は見当たらない。舟橋博士は、真谛訳の「本の故意の差別」が玄奘の「審決勝思」に該当し、「事の故意の差別」が「動発勝思」に該当すると解さ

れているが<sup>2)</sup>、玄奘のように「思」を三種に分けて説いていない。また、同じ玄奘訳の『順正理論』の該当箇所をみても、「動發身語」という語はあるが<sup>3)</sup>、「審決勝思・動發勝思」という訳語は付していない。とすると、玄奘は『俱舍論』で意図的に *cetanā-viśeṣa* を「三種の思」と解釈したことになる。

## 2. 經量部の業説として説かれる「三種の思」『光記』は玄奘の根拠が『成業論』にあると次のように説く。

大乘成業論に説かく。一に審慮思、二に決定思なり。當に此の論の思惟の思は是れ思業に攝むべし。三に動發思。當に此の論の作事の思に攝むべし。(大正 41・205a)

ここに引かれる『成業論』は次の通りである。

【チベット訳】思には三種あり、趣向と決定と動作すること〔の三種〕である。

(D.144a5, 山口本 p.29, 室寺本 p.53)

【玄奘訳】思には三種有り。一に審慮思、二に決定思、三に動發思なり。

(大正 31・785c)

『成業論』は、チベット訳、両漢文ともに思には「審慮思・決定思・動發思」の三種がある<sup>4)</sup>、と説くから世親が『成業論』を著した時には、世親にこの「三種の思」が思想の上で成り立っていたであろう。また、『光記』はこの中で、前の二思を「思惟の思」に、第三思を「作事の思」に当てており、それは次に掲げる經量部の業説と同じ解釈である<sup>5)</sup>。

【玄奘訳『俱舍論』】謂はく、前の加行に思惟の思を起こして、我れ當に應に是くの如く是くの如きの應に作すべき所の事を爲すべし〔と思ふ〕を名づけて思業と爲す。既に思惟し已りて事を作す思を起こし、前の所思に隨ひて所作の事を作し、身を動かし語を發するを思已業と名づく。(大正 29・68c)

『宝疏』によれば、「思業」を「思惟の思」に「思已業」を「作事の思」に分けるのが經量部の業説であると説いている<sup>6)</sup>。また『光記』は、

「加行」より「思已業と名づく」に至るは、經部の通釋なり。思惟の思は是れ遠因等起なり。作事の思は是れ近因等起なり。一中略— 欲界の散心の思の種子の無表は、前に現行せる審慮勝思・決定勝思との遠因等起と動發勝思の近因等起とに由りて引生せらるるが故に、云々。(大正 41・205ab)

と解釈し、「三種の思」を「遠因等起」と「近因等起」とに分ける。そして、同じ『俱舍論』で説かれる經量部の業説についても「遠因等起」と「近因等起」とに分けて説く。この『光記』の解釈によれば、玄奘が『俱舍論』で付加した「三

(192) 「思」に対する玄奘の訳語（濱 野）

種の思」は經量部の業説を意識していることになる。また、『成業論』は

【チベット訳】先に三種の思が説明された、その中の〔趣向思・決定思の〕二が思業である。三つ目の〔動作思〕が生起するからそれを思已業という。

(D.144b5, 山口本 p.30, 室寺本 p.55)

【玄奘訳】即ち前の所説の三種の思の中、初の〔審慮・決定の〕二種の思を名づけて思業と為す。第三の〔動発の〕一思を思已業と名づく。(大正 31・786a)

と説き「三種の思」をそれぞれ『俱舍論』でいう「思惟の思」である「思業」と「作事の思」である「思已業」に当てている。したがって『俱舍論』で説かれる經量部の業説が玄奘訳の「三種の思」を説く上で大きく関わっていると思われる。

**3. 瑜伽行派からの影響性** 『瑜伽論』にも「加行思・決定思・等起思」という「三種の思」が次のように説かれている<sup>7)</sup>。以下がその文である。

【Vinīścayasamgrahāṇi】すなわち、善の身と語の表色と不善の〔身と語の表色〕を施設し、造作する思と決定する思と等起する思を〔起こす〕。(D.55a1)

【玄奘訳】答ふ、若し略して説かば、軟・中・上の品の三種の思の差別に由るが故なり。一に加行思、二に決定思、三に等起思なり。(大正 30・600a)

『瑜伽論』と『成業論』とは玄奘訳・チベット訳ともに訳語が異なるので別な思想を説いている可能性もあるが、後の慈恩大師基等の注釈によれば、『俱舍論』や『成業論』で翻訳した際の「三種の思」は『瑜伽論』の「三種の思」と解釈の上では一致していると考えられる。『義林章』は

成業論・瑜伽等とに説かく、三種の思有り。一に審慮思、將に身・語を發せんとして先づ審慮するが故に。二に決定思、決定の心を起こして將に作さんと欲するが故に。三に動發勝思、正しく身・語を發こして事を動作するなり。(大正 45・300c～301a)

と説き、『文林鈔』も略々同じようなことを説く<sup>8)</sup>。このことから『成業論』の「三種の思」と『瑜伽論』の「三種の思」は同じものとして解釈されていることがわかる。さらに『瑜伽師地論略纂』や『瑜伽論記』は、「遠因等起・近因等起」にわけて『瑜伽論』の「三種の思」を解釈している<sup>9)</sup>。これは、『俱舍論』の「三種の思」を注釈した『光記』の解釈と通じるものがある。

**おわりに** 以上のことから、注釈書や先学の説くように、『成業論』もしくは經量部の業説に基づく玄奘訳『俱舍論』の「三種の思」は、『瑜伽論』にその起源があるといえるのかもしれない。しかし、玄奘が訳語を変えていたり、『成業論』

と『瑜伽論』での訳語の不一致等からすると、世親が『瑜伽論』の説を参考にして、『成業論』において独自の思想を打ち立てようとしていたのかもしれない。なぜならば、最近の先行研究には世親が『瑜伽論』の説を明らかに知っていたという反面、『瑜伽論』の説を『成業論』の中でそのまま用いるとは考えがたい<sup>10)</sup>、という指摘もあるからである。つまり、玄奘は「三種の思」の解釈において、『成業論』で説かれる業説が経量部の業説と一致するものと解釈し、『成業論』の説を『俱舍論』に付加することによって、世親の業説をいっそう明確に示そうとしたのであろう。また、注釈書が示すように『瑜伽論』の説と同一のものであるならば、『俱舍論』に唯識の思想ともとれる「三種の思」を付加したことは、どこか玄奘の意図が感じられ、世親が唯識的思想をも加味していたことを示そうとしたのであろう。

- 
- 1) 舟橋一哉『業の研究』法蔵館 1954 年 山口益『世親の成業論』法蔵館 1975 年 山口益「成業論の原典に対する一疑問」『仏教学セミナー』第 20 号 1974 年 室寺義仁「ヴァスバンドゥによるアーラヤ識概念の受用とその応用」『高野山大学論叢』第 27 卷 1992 年 原田和宗「言語に対する行使意欲としての思弁（尋）と熟慮（伺）～経量部学説の起源～」『密教文化』第 199・200 号 1998 年。
  - 2) 舟橋前掲本 pp.53～54.
  - 3) 大正 29・537bc.
  - 4) 毘目智仙訳『業成就論』にも「思量・決定・進趣」とある。大正 31・780c.
  - 5) 山口前掲本 p.244 註 11 参照。
  - 6) 大正 41・631a.
  - 7) 舟橋前掲本 p.93 の註 24 及び山口前掲本の p.239 の註 11 参照。
  - 8) 日蔵 50・366b.
  - 9) 大正 42・636a 大正 43・196b.
  - 10) 室寺氏前掲論文。

〈キーワード〉 『俱舍論』, 『成業論』, 玄奘, 三種の思, 経量部の業説

(龍谷大学大学院)